

出征、軍隊、抑留という波乱万丈の三年六カ月はここに終わる。

シベリア抑留の思い出

和歌山県 久保田 耕 作

ソ連のダンプカーから降ろす土石でどんどん埋もれていく。零下三〇度の夜間作業、万事休す。

自分の体はだんだん冷たくなってゆく。その時パッと目が覚め、あゝここは日本や我が家や、復員して五十年になるというのにこのような夢を見る。シベリア抑留のことが身にしてみているのだろうか。

私昭和二十(一九四五)年四月、関東軍予備士官学校(石頭)に希望に燃えて入校したが、その年の八月に敗戦(昭和二十年八月)。十一月に三〇二收容所に抑留。二十一年の春三〇一のリエル小隊に転属、二十二、二十三年と井戸掘り、路

面建設、駅付近の水道管設置のために穴掘り。一貫して厳しい重労働に従事した。二十四年の春、残り少なくなった隊員と共に、ハバロフスクに移動、各方面から残員と合同、大きなレンガ作りの家を建築する。

二十四年十一月中旬、やっと最終に近い船で舞鶴港に上陸、懐かしの日本の地を踏んだ時の喜び、感激は忘れられません。

復員後、公務員もし、その後結婚し四人の子供と孫に囲まれ、色々事業もやったが力不足等もありましたが、何とかまあまあ生活です。次男は家業の醤油屋をやり、私共も同居しております。私は今は小さなホテルの下足番をして働いております。車が好きで各地を運転して飛び廻っております。